



松竹を立てる民俗

秋 葉 隆

歐羅巴を旅行して居ると滅多に松の木を見ない。たまにあつても木振り葉の妻が日本のものとは違つた感じを興へられるし、松林の美に至つては殆んど本に出會ふ事がない。只南イタリヤの丘の上などに土佐繪風の赤松を見出した時は限りなく懐しさを覺得る海である。竹に至つては斷然無い。従つて日本人が竹の子を食ふと聞いて、吾等の齒の丈夫なのに驚く彼等である。

然るに東洋殊に支那朝鮮日本には、至るところ松林の美しさがあり、猶日本から南支那にかけてはすばらしい竹林の美を見る。朝鮮では中部以北に竹が無く、京城の經學院大成殿の石階の下に植えた笹が辛うじて生えて居るといふ有様である。

所で日本の正月に、門毎に松竹を立てる風が、何れの時代から起つたかは別問題として、特に朝鮮及び滿洲

に於ける^此類似の民俗に就いて考へて見たい。第一に滿洲では正月に門松を立て(寒頭寒集第十圖)、又高い竿を立て、其の先に松ヶ枝をつける風があつて、之に燈籠を掲げる(寒集第十圖)。昨春北^京平に旅行した時に、未だ陰の正月中であつたので、途中滿洲でこの長竿の聳ゆる民家を屢々見うけたが、中には青天白日旗などをつけたのもあつた。而も此風は北京の郊外にも見られ、そこでは竿頭に柏と胡麻殻をつけ^{てあつた}もの^{であつた}が(寒集第十圖)、一般に滿洲に多く、南するに従つて稀なる所から考へると、どうも滿洲族の遺風ではないかと思はれる。燈籠は天燈と稱して正月元日に懸け、二月二日に下ろすことになつて居て、それは「眼光娘々」に眼のよくなるやうに祈る意味だといはれ、又姜太公のために捧げるものだと稱せられるが、兎に角この松竿が神の降る神竿であることに疑は無からう。尙吉林邊に行く^所と正月に家々の前に常緑樹を立てる風があるさうであるが、竹は勿論滿洲には無いから之を立てることは無い。

次に朝鮮では正月に松竹を立てる風を何處にも見ないが、城隍神祀とか別神祀とか稱するお祭りの時には、長大なる竹竿の先に松を結んで、神竿を立てる行事があつて、人々は其の神竿の立つのを見て神の喜ぶ兆とする。殊に濟州島南部に於ては、巫覡が賽神を行ふに當り、其家の庭前に長大なる竹を立て、之に椿の葉、松の枝等を結び、更に白木綿、麻布等を長く引いて神橋となし、屋内の神堂に神々を導く姿をとつて居る(寒集第四圖)。更に其の神^{イシ}神といふ祭節にあつては、青笹一本に紙片をつけたものを振りまはしつゝ、亂舞すること、南鮮殊に全南地方の^{オグプアリ}オグプアリと稱する祭節と同様である。

る(寫真第四圖)。更に其の竿神タイシノといふ祭節にあつては、青笹一本に紙片をつけたものを振りまはしつゝ、亂舞すること、南鮮殊に全南地方のオケブリと稱する祭節と同様である。

又南鮮では盲頌讀經の神事を行ふに際して、其家の入口に禁繩を張り黄土を點すること他の地方と同様であるが、其禁繩には青笹を並べ結び、中央に松ヶ枝をつけるを特徴とする。産忌の禁繩に木炭胡椒等と共に青松葉をつける風は京城邊にも見られる。

斯くの如く青々として清く、先が尖つて惡魔を突きさすやうな笹や松葉を吊りめぐらして穢れを防ぐ思想と、青竹を立て松飾りをして神竿の上に神を招ぎ下ろす觀念とは、根本に於て同じ信仰の兩面である被禊と招請とを意味するものであつて、日本の正月の松竹も亦同様なる信仰にもとづいたものと考へられる。

古き年を送つて新しい年を迎へる。人々はこの舊より新への關所に於て、平常とは異なる重大性を感じざるを得ない。それは新玉の年立ちかへる時、換言すれば新らしい靈魂たまの來る時である。お年玉といふのは新らしい年神の新しく強い靈魂たまといふ意味であつて、人々がこの歲靈としたまの靈威によつて更生するのが正月である。従つて斯かる重要な機會に於て、人々は日常の衣服とは異なる晴着を纏ひ、日常の食物とは異なるお雑煮を食べ、常には飲まぬ屠蘇を飲んで、日常の勞働に従ふことを禁忌される。英語ではかゝる日を聖日ホリデー(休日)といふ。此の意味に於て正月は正しく神月である以上、門毎に立てる松竹が新神靈あらたまの降る神竿であることに不思議は無い。滿洲の松竿、朝鮮の神竿、日本の門松、所詮は同様なる信仰の上に生れた文化の形相に外ならないが、只そこは北方アジア・シヤマニズム文化の悠久なる歴史的連絡があるか如何かは、かくの如き點描的な雜文で論斷する譯には行かない。

序に聯想されるのは松竹梅のことであるが、日本では之に鶴龜が配せられる。所が朝鮮の十長生は、總督

府編纂の朝鮮語辭典によれば、日・山・水・石・雲・松・不老草・龜・鶴・鹿を意味し、松・鶴・龜の三つだけが日本と共通であつて、梅と竹とは之に加はらないやうである。此の支那を本地とする道教文化の十長生と、日本の松・竹・梅・鶴・龜の結合形態との間にも、必ずや何等かの關係があるものと思はれるが、それは現在の私は分は過ぎた大問題である。それにしても考へられることは西洋の學者の書物を翻譯して、原語交りの學説を高遠らしい文句で受賣りすることの容易さと、未墾の學界である東方民俗の複雑な姿を理解することの困難さである。例の郷土教育と稱するものゝ如きも、願はくば獨逸のハイマートクンデが如何したからといふやうな舶來の原理に引きずられずに、現實に吾等の周圍を環る郷土に根ざした存在理由を認識した上にこそ打建てらるべきではないか。獨逸で郷土教育が流行るから日本でもと云ふことほど、反郷土的な現象は無い。郷土を見る眼、それは畢竟民俗を理解する心である。私などは朝鮮語も知らずに朝鮮の民俗に關心をもつ不心得者であるが、幸にして全鮮の同好の士と共に、眞に郷土教育の根底たるべき民俗の研究に努めたいと思つて居る。基礎工事も出來ないうちに、出し拔けに「郷土教育建築！」の號令をかけられても、手も足も出る道理はないから。

附言 卷頭寫眞第一圖・第二圖は奉天滿洲醫科大學教授黑田源次氏の惠贈にかゝるもの、第三圖は北平日本公使館石橋丑雄氏の案内によつて、北平南郊で筆者の撮影せるもの、第四圖は濟州島西歸浦に於て、西歸公立普通學校長川原勘次氏其他の好意により、同地の巫家に賽神を見學せる際に、筆者の撮影せるものである。此機會に於て此等の方々の學恩を謝すべく、年賀狀の代りに此の雜文を捧げる。